

# たかさし史話 43 『日露戦時下の高砂』

二〇〇四年の年明けを、い  
かがお迎えでしょう。今年  
こそ、世界の各地から戦争や  
テロがなくなり、平和な年にな  
るところを願ってやみません。  
百年前の一九〇四（明治三七）  
年は、日本は、たいへんな緊  
張感の中で年明けを迎えまし  
た。

日清戦争の後、朝鮮半島や  
中国東北部の支配権をめぐり、  
日本は世界の大口シアと対  
立していきました。日露間の交  
渉は難航し、前年末には開戦  
準備が始まっていました。国  
内世論も圧倒的に開戦支持で、  
ついにこの年の二月十日には  
宣戦布告されました。  
露戦争は、日本の総力をあげ  
て戦われた戦争で、動員され  
た兵力は百万人、死傷者は  
二十万人を越えました。戦費  
は約十七億円で、国内外で募  
集する国債や増税によってま  
かなわれましました。当時の年  
国家予算が二、三億円という  
時代です。から、いかに過重な  
負担だったかがわかります。  
内、それだけに日露戦争は、国  
もたらし、国民に大きな犠牲  
を払わせました。  
に、当時の新聞から、高砂市域  
における戦時下の動きをひろ  
いだし、みる。早くも開戦  
直後から、加古郡・印南郡の  
各社で戦勝祈念祭が行われ、  
高砂町長が姫路師団の兵員を  
慰問するといつた記事が目

とまります。

また、戦費となる国債は、  
各町村単位に募集額が強制的  
に割り当てられていたよう  
で、その応募状況なども報じ  
られていました。ほかに、高砂  
尋常小学校生徒九十三名が、  
それぞれ十、二十錢程度の慰  
問金を持ち寄り、載せられて  
氏名まで載せられていました。  
戦況は、当初は日本側優位  
のうちに進み、国内ではしば  
しば祝勝会が開かれました。  
た、たとえば、九月初旬の遼陽会  
戦での勝利が伝えられた際  
は、高砂町内では、三千余名  
が提灯行列を行って祝意を表  
すなどして行っていました。  
れ、しかし、戦争が長引くと  
て、帰還する者の病傷兵となつ  
うに、加古郡・印南郡では、毎  
日どこか、た、この記事も見  
か、け、ます。  
院、また、姫路に、高砂町  
院、また、姫路に、高砂町  
などが、転地療養所に指定され  
ました。町では、十輪寺など  
四か寺に、傷病兵を収容し、手  
厚く、加療して、様子を、逐  
一、新聞に、報じられて、いま  
負、担、を、強い、ながら、帝、国、主、義  
国家、として、の、道、を、ひ、た、す、ら、歩  
んで、い、つ、た、と、い、う、の、が、百、年  
前の、日本、の、姿、で、し、た。

（市史編さん専門委員 松下孝昭）